

多賀城市文化財調査報告書第63集

高崎・西沢遺跡

—高崎遺跡第26次・西沢遺跡第7次調査報告書—

平成13年3月

多賀城市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成10年度に実施した高崎遺跡第26次調査、平成11年度に実施した西沢遺跡第7次調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は多賀城市教育委員会が主体となり、多賀城市埋蔵文化財調査センターが担当した。
3. 遺構番号は第1次調査からの連続番号である。
4. 捃図中の数値(m)は標高値を示している。
5. 調査区の実測基準線は「平面直角座標系X」を使用して設定した。
6. 土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原:1973)を参照した。
7. 本書の作成に関する資料整理および執筆については、当センター職員の協力を得て以下のように分担した。なお、編集については、石川俊英・相澤清利・武田健市・菊池豊が協議して行った。

○高崎遺跡第26次　　資料整理　　武田健市、菊池豊

　　執　　筆　　武田健市

○西沢遺跡第7次　　資料整理　　相澤清利、佐藤恵子

　　執　　筆　　相澤清利

8. 調査に関する諸記録および出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I. 多賀城市の位置と地理的環境	1	III. 西沢遺跡第7次調査	
II. 高崎遺跡第26次調査		1. 遺跡の位置と歴史的環境	20
1. 調査区の位置	3	2. 調査に至る経緯と調査経過	20
2. 調査に至る経緯と調査経過	3	3. 調査成果	22
3. 調査成果	8	4. ま　と　め	22
4. 遺構の年代	16		
5. ま　と　め	16		

要　　項

○高崎遺跡

遺　跡　名	高崎遺跡（宮城県遺跡登録番号 18018）
所　在　地	多賀城市留ヶ谷一丁目95-5, 99-4, 100, 101-6
調　査　面　積	720 m ²
調　査　期　間	平成10年4月2日～平成10年4月23日
調　査　員	石川俊英、武田健市、菊池豊、堀口和代、佐藤恵子、文屋亮

○西沢遺跡

遺　跡　名	西沢遺跡（宮城県遺跡登録番号 18017）
所　在　地	多賀城市浮島字沢前20他
調　査　面　積	180 m ²
調　査　期　間	平成11年4月15日～平成11年4月28日
調　査　員	相澤清利、佐藤恵子

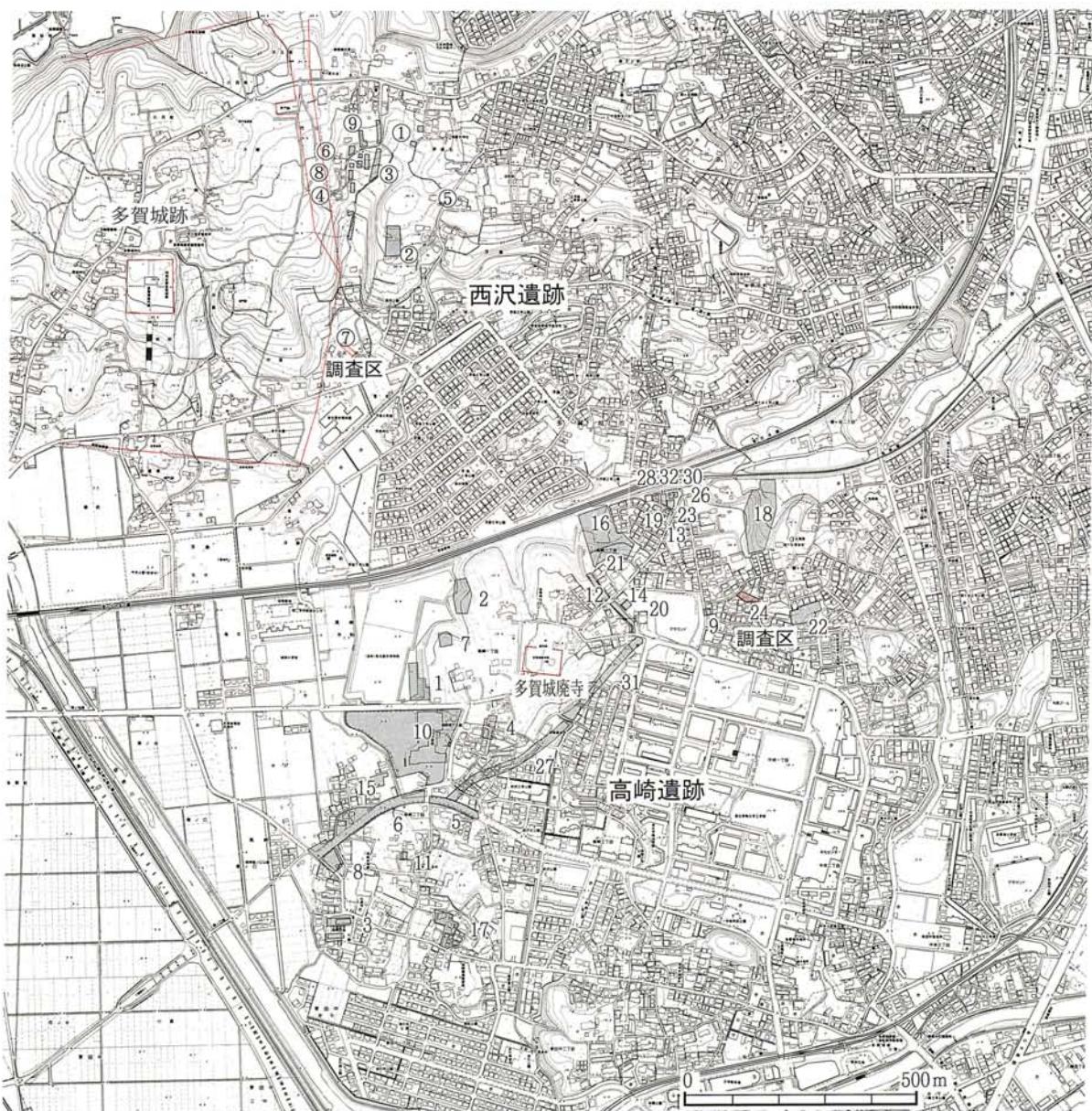
I. 多賀城市の位置と地理的環境

高崎・西沢遺跡が所在する多賀城市は、仙台市の中心部から北東約10kmに位置している。南西部で仙台市、北西部で利府町、北東部で塩釜市、南東部で七ヶ浜町とそれぞれ接しており、総面積は約1,966haである。西南部を七北田川、中心部を砂押川が東西に貫流しており、共に仙台湾に注いでいる。

本市の地形については、利府町の丘陵地帯に源を発する砂押川を境に東側の丘陵地と西側の沖積地に大きく二分することができる。丘陵地は多賀城台地と称される海拔50m前後の低丘陵であり、沖積地と接する付近では大小の谷が複雑に入り組んだ地形となっている。一方、沖積地は仙台平野の北東端部に位置し、海拔3～4mの極めて平坦な地形を呈している。



第1図 多賀城市の位置



第2図 遺跡の位置

高崎遺跡調査成果一覧

番号	調査次数(年度)	発見遺構	出土遺物
1	第 1 次(昭和55年度)	古代：掘立柱建物、合口甕棺	
2	第 2 次(昭和56年度)		瓦
3	第 3 次(昭和57年度)	古代：溝、土壤、埋甕	
4	第 4 次(昭和60年度)	古代：柱列、溝、土壤	瓦、風字硯
5	第 5 次(昭和60年度)	古代：掘立柱建物、堅穴住居 中世：土壤	灰釉陶器、円面硯 無釉陶器擂鉢
6	第 6 次(昭和61年度)	古代：掘立柱建物、堅穴住居、柱列、井戸、合口甕棺 中世：溝、井戸、土壤	墨書き土器、瓦 青磁碗
7	第 7 次(昭和63年度)	古代：掘立柱建物、溝、土壤 近世：屋敷、地鎮遺構	瓦 輪宝墨書き土器、陶器、古銭
8	第 8 次(平成 3 年度)	古代：掘立柱建物、井戸、道路 中世：掘立柱建物、溝、土壤 近世：道路	墨書き土器 無釉陶器甕・擂鉢 陶器
9	第 9 次(平成 4 年度)	古代：堅穴住居、溝、土壤	
10	第 10 次(平成 5 年度)	古代：掘立柱建物、堅穴住居、工房、井戸	灰釉陶器瓶、鉄製匙、漆紙文書、羽口、鍛造剥片
11	第 11 次(平成 6 年度)	古代：堅穴住居、石組暗渠、灯明皿廐棄場 中世：溝	灯明皿、青磁 瓦質器擂鉢
12	第 12 次(平成 6 年度)	古代：掘立柱建物、堅穴住居 中世：掘立柱建物、井戸	瓦、円面硯 かわらけ
13	第 13 次(平成 6 年度)		
14	第 14 次(平成 6 年度)	古代：溝	瓦
15	第 15 次(平成 6 年度)	古代：堅穴住居	
16	第 16 次(平成 7 年度)	古代：掘立柱建物、堅穴住居 近世：井戸	円面硯、灯明皿
17	第 17 次(平成 7 年度)	古墳時代：石製模造品工房 古代：漆塗り工房	石製模造品 漆付着土器
18	第 18 次(平成 7 年度) 第 19 次(平成 8 年度)	縄文：包含層 古代：掘立柱建物、堅穴住居 中世：掘立柱建物、	石礫 石帶 青磁、白磁
19	第 20 次(平成 8 年度)	古代：掘立柱建物	
20	第 21 次(平成 8 年度)	古代：堅穴住居	瓦
21	第 22 次(平成 9 年度)	古代：堅穴住居	赤焼き土器
22	第 23 次(平成 9 年度)	中世：平場、柱穴	施釉陶器花盆・水滴
23	第 24 次(平成 9 年度)	土壘	
24	第 25 次(平成 9 年度) 第 26 次(平成 10 年度)		本 報 告
25	第 27 次(平成 10 年度)	古代：柱穴	
26	第 28 次(平成 10 年度)	柱列、溝	
27	第 29 次(平成 10 年度) 第 30 次(平成 11 年度)	古代：堅穴住居 近世：井戸	
28	第 31 次(平成 12 年度)	古代：土壤	
29	第 32 次(平成 12 年度)	古代：掘立柱建物、土壤	斎串
30	第 33 次(平成 12 年度)		
31	第 34 次(平成 12 年度) 第 35 次(平成 12 年度)	古代：掘立柱建物	
32	試掘調査(平成 2 年度)	中世：溝跡	茶臼

西沢遺跡調査成果一覧

番号	調査次数(年度)	発見遺構	出土遺物
①	第 1 次(平成 2 年度)	古代：掘立柱建物、堅穴住居	
②	第 2 次(平成 6 年度)	古代：掘立柱建物、堅穴住居 中世：掘立柱建物	石帶、瓦、轡
③	第 3 次(平成 7 年度)	古代：堅穴住居、鍛冶工房 中世：掘立柱建物	墨書き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁碗
④	第 4 次(平成 9 年度)	古代：掘立柱建物 中世：掘立柱建物	灰釉陶器、緑釉陶器 青磁、白磁
⑤	第 5 次(平成 9 年度)	古代：掘立柱建物	灰釉陶器
⑥	第 6 次(平成 10 年度)	中世：溝 近世：溝	無釉陶器 陶器
⑦	第 7 次(平成 11 年度)		本 報 告
⑧	第 8 次(平成 11 年度)	古代：堅穴住居 中世：溝、 近世：溝	灰釉陶器、緑釉陶器 青磁、白磁 陶器
⑨	第 9 次(平成 12 年度)	古代：掘立柱建物、堅穴住居 中世：掘立柱建物、溝 近世：溝	灰釉陶器、緑釉陶器、瓦 青磁、白磁 陶器

II. 高崎遺跡第26次調査

1. 調査区の位置

高崎遺跡は、多賀城市東半部にある低丘陵の西端部に位置しており、特別史跡多賀城廃寺を取り込むように、南北約1.1km、東西約1.2kmの範囲を占めている。本遺跡では、これまで多くの調査を実施しており、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構、遺物を発見している。

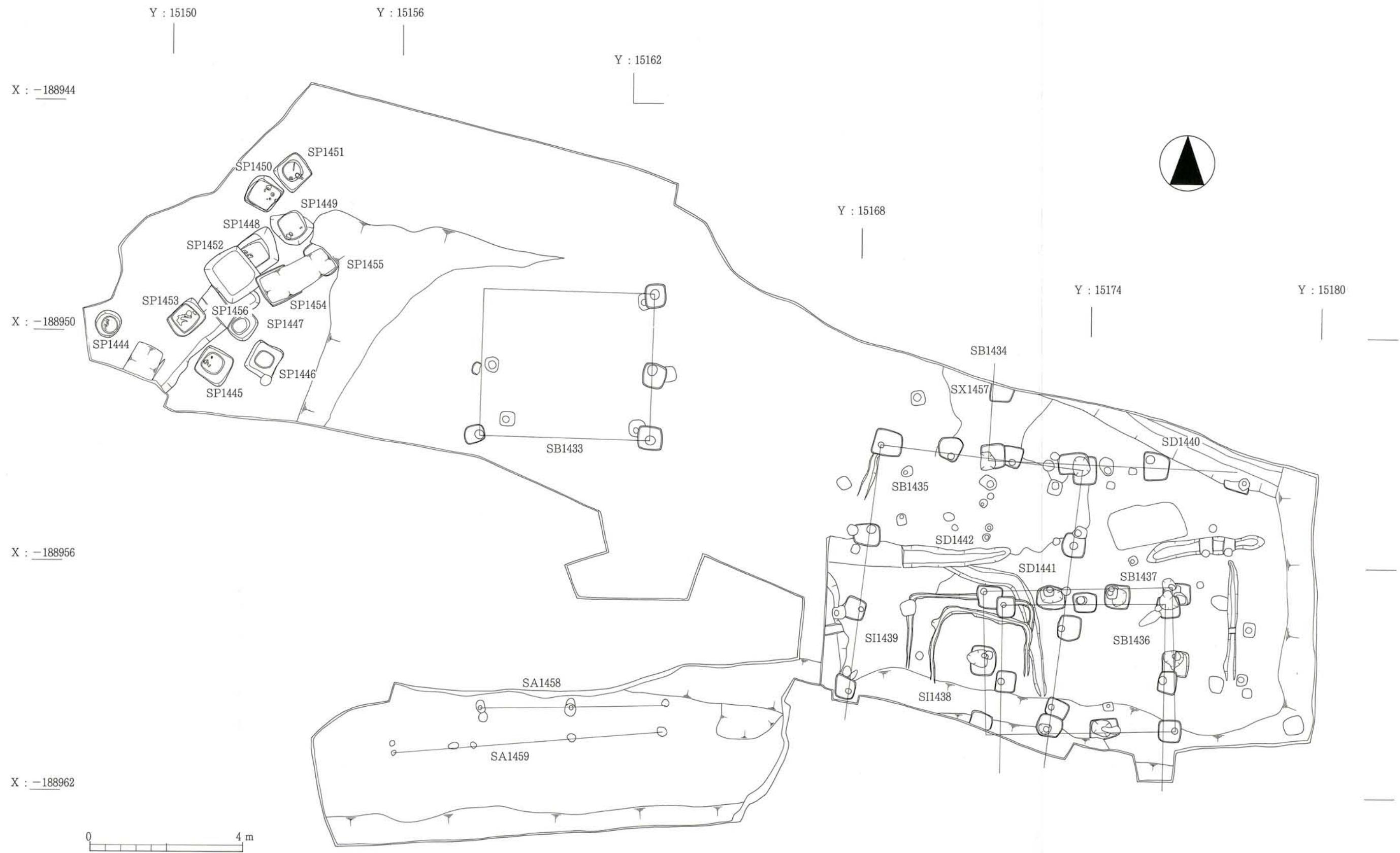
今回の調査区は、遺跡の北端部に位置しており、特別史跡多賀城廃寺の北東側約450mの地点にある。調査区内の地形についてみると、西側が丘陵頂部付近となっているが、中央部は後世の搅乱を受けており東側に向って急激に傾斜している。東半部については緩やかな南斜面となっており、この緩斜面は調査区の南東側にかけて広がっている。

2. 調査に至る経緯と調査経過

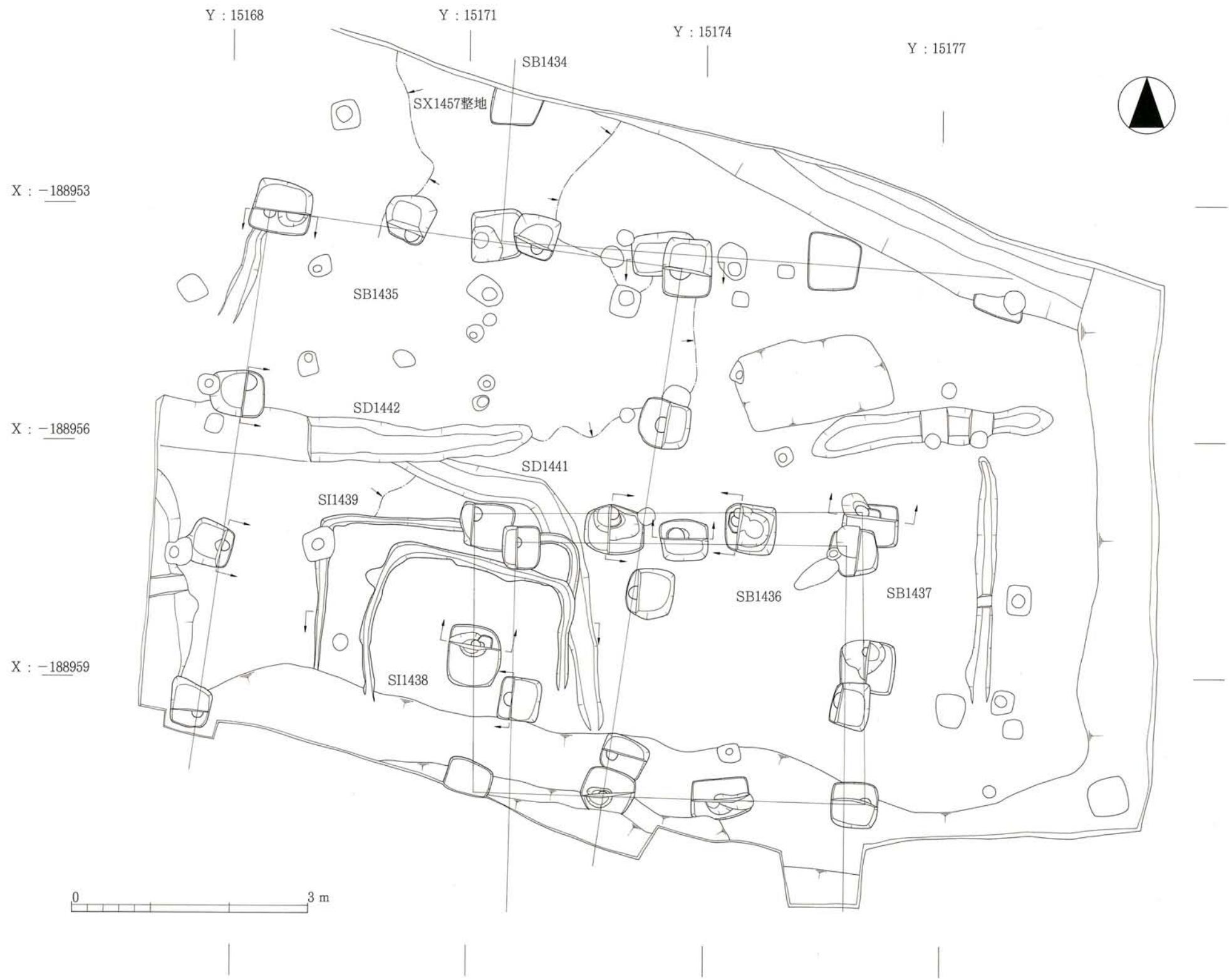
本件については、平成9年12月1日付けで株式会社太陽住建より、留ヶ谷一丁目地内における宅地造成計画が提出された。造成の計画案では現況を著しく変更する内容であったものの、当該地区における遺構の分布状況については未確認な部分が多いことから、確認調査を実施し遺構が検出された場合に事前調査を行うということで調査を開始した。平成10年2月25日、遺構の分布状況を確認するため、対象区内の中央部に調査区を設定する。翌日から平面の精査を行った結果、古代のものと思われる柱穴や竪穴住居跡、溝跡などを発見した。このため、事前調査で対応する必要が生じ、翌年度の4月1日、株式会社太陽住建と発掘調査の委託契約を締結し事前調査に着手した。4月2日、重機により対象区内全域の表土除去を開始する。また、作業員を導入して確認調査で検出した柱穴や竪穴住居の再精査を行う。4月13日、実測図作成のための基準点を設置する。4月14日、調査区東半部の精査が概ね完了する。その結果、古代の掘立柱建物跡が5棟、竪穴住居跡が2棟存在することが明らかとなった。また、建物跡ではSB1437に束柱が伴うことも判明した。4月15日、調査区内に3m×3mの方眼グリッドを設置し、1/20の平面図を作成する。その後、柱穴の断ち割り調査を行い、各柱穴ごとに半載状況の写真を撮影する。4月20日、東半部全体の写真撮影を行い、建物跡、竪穴住居跡の調査を終了する。翌4月21日から西半部の調査を開始する。



第3図 調査区位置図



第4図 調査区全体図



第5図 東半部検出遺構平面図

精査の結果、残存状況は悪いものの、近世の墓跡が12基存在していることが明らかとなった。1/20の平面図を作成し、ただちに断ち割り調査を実施する。墓壙内からは点数は少ないものの埋葬された古銭や煙管、陶磁器、漆器などが出土地した。4月23日、近世墓群の写真撮影を行い、本調査の一切を終了した。

3. 調査成果

今回の調査では、古代の掘立柱建物跡5棟、竪穴住居跡2棟、近世墓12基などを発見した。以下、発見した遺構と遺物について記載する。

1) 掘立柱建物跡

【S B1433掘立柱建物跡】(第4図)

調査区中央部の地山上で発見した南北2間、東西1間の掘立柱建物跡である。残存状況が悪く東側柱列と南西隅柱を検出したのみであるが、そのすべての柱穴で柱痕跡を確認している。規模は東側柱列が総長3.82m、柱間は南から1.81m・2.00mである。南側柱は4.67m(2間分の可能性あり)である。方向は東側柱列で計ると、発掘基準線に対して北で約2度東に偏している。柱穴は長辺約65cm、短辺53~60cmの方形であり、残存する深さは6~18cmである。埋土は褐色および明褐色土が主体であり、地山ブロックが多く混入する。柱痕跡は径26~28cmの円形であり、炭化物が粒状に混入している。

遺物は、掘方埋土から須恵器杯・甕、土師器甕が出土した。

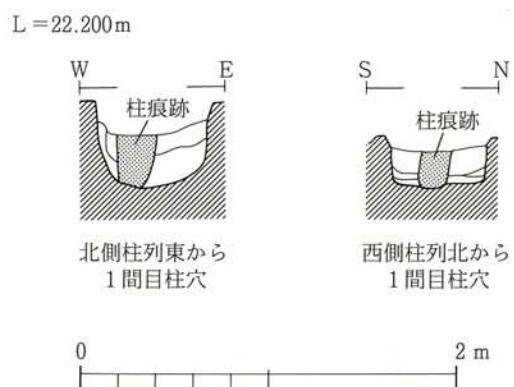
【S B1434掘立柱建物跡】(第4・5図)

東半部の地山およびS X1457整地層上面で発見した東西3間以上、南北1間以上の掘立柱建物跡である。S B1435掘立柱建物跡、S D1440溝跡と重複し、前者よりも新しく、後者よりも古い。規模は柱穴の中心に柱位置を想定すると、南側柱列で6.5m以上、柱間が西から約2.1m・約2.2m・約2.2mである。方向は南側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約4度北に偏している。柱穴は長辺65~82cm、短辺55~68cmの方形であり、残存する深さは4~12cmである。埋土は灰黄褐色土が主体であり、地山ブロックが多量に混入する。

遺物は掘方埋土から須恵器杯・甕が出土した。

【S B1436掘立柱建物跡】(第4・5・6図)

東半部の地山上で発見した南北2間以上、東西2間の掘立柱建物跡である。S B1437掘立柱建物跡、S I1438・1439竪穴住居跡と重複し、それらよりも新しい。検出した柱穴のうち4基で柱痕跡、1基で柱抜取穴を確認した。規模は北側柱列が総長約4.3m、柱間が西から2.02m・約2.3m、西側柱列は1.99m以上である。方向は北側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約1度北に偏している。柱穴は長辺54~65cm、短辺46~60cmの方形であり、残存する深さは24~45cmである。埋土は2~3層に細分することができる。いずれも褐灰色、にぶい黄褐色土が主体であり、地山小ブロックが多く混入する。柱痕跡は径13~22cmの円形である。



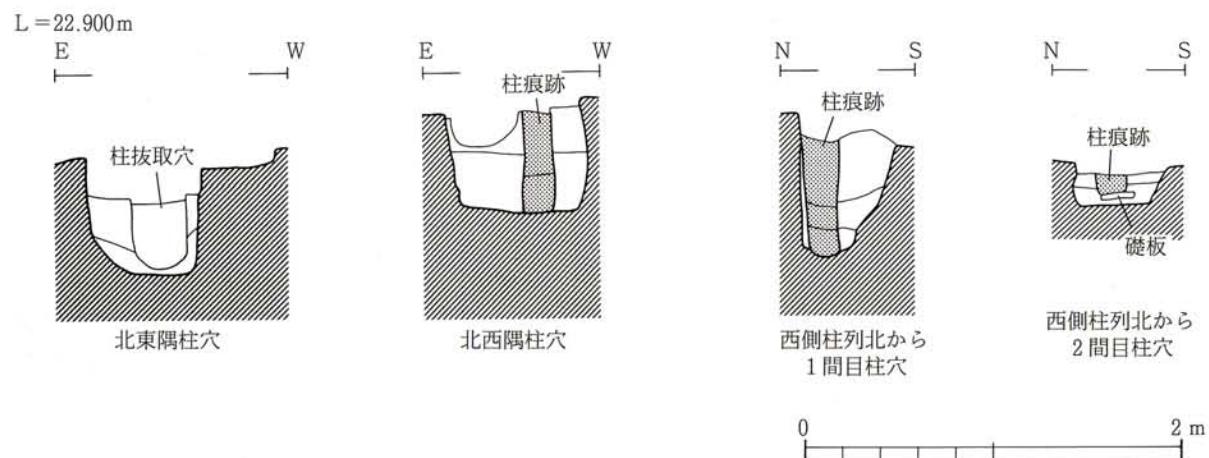
第6図 S B1436掘立柱建物柱穴断面図

遺物は掘方埋土から須恵器杯・甕、土師器杯・甕が出土した。このうち土師器杯では底部手持ちヘラケズリものが確認できる。

【S B 1435掘立柱建物跡】（第4・5・7図）

東半部の地山およびS X 1457整地層上面で発見した桁行き4間以上、梁行き3間の南北棟掘立柱建物跡である。S B 1434・1437掘立柱建物跡と重複し、それらよりも古い。10基の柱穴を検出しており、北東隅柱が抜き取られている以外は、すべての柱穴で柱痕跡を確認した。規模は桁行が東側柱列で6.2m以上、柱間が南から2.04m・2.15m・約2.0m、西側柱列では6.42m以上、柱間が南から2.14m・2.09m・2.19mである。梁行は北妻で総長約5.2mであり、柱間は西より約1.8m、1.61m、約1.8mである。方向は西側柱列で計ると、発掘基準線に対して北で約7度東に偏している。柱穴は長辺56~75cm、短辺45~67cmの方形であり、北妻の東から1間目と2間目の柱穴の規模がやや小さめである。残存する深さは15~74cmであり、底面を標高値で見た場合でも30~60cmの高低差が確認できるなど非常にばらつきが多い。埋土はいずれも2~3層に細分することができる。にぶい黄褐色土、灰黄褐色土が主体であり、地山ブロックが多く混入する。柱痕跡は径15~20cmの円形である。

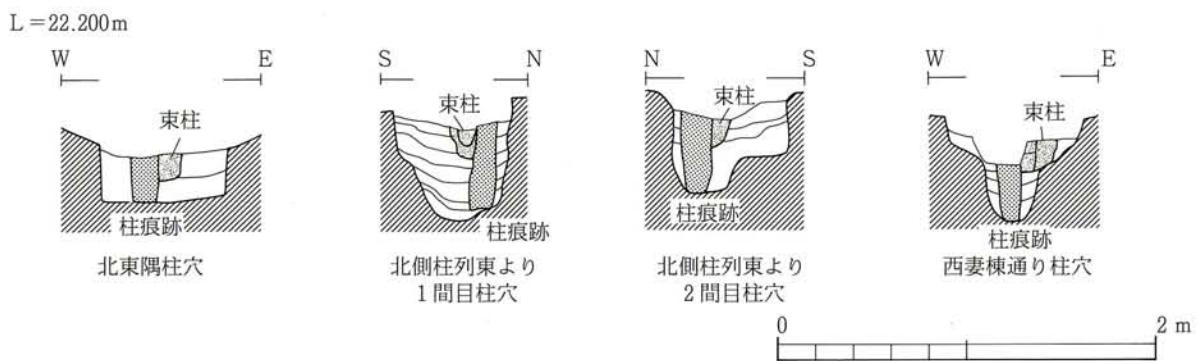
遺物は掘方埋土から須恵器杯、土師器甕が出土した。このうち須恵器杯には回転糸切り後手持ちヘラケズリ調整が施されるものがある。



第7図 S B 1435掘立柱建物柱穴断面図

【S B 1437掘立柱建物跡】（第4・5・8図）

東半部の地山上で発見した桁行き3間、梁行き2間の東西棟掘立柱建物跡である。S B 1435・1436掘立柱建物跡と重複し、前者よりも新しく、後者よりも古い。すべての柱穴を検出しており、そのうちの8基で柱痕跡、1基で柱抜取穴を確認した。また、北西隅柱を除く北側柱列と西妻棟通り柱穴では柱痕跡に接する床束を検出している(註)。規模は桁行が北側柱列で総長4.95m、柱間が西から1.75m・1.58m・1.62mである。梁行は東妻で総長3.84m、柱間は南より1.98m、1.86mである。方向は東妻で計ると、北で0度19分西に偏している。柱穴は長辺65~78cm、短辺56~68cmの方形であり、柱痕跡の周辺を段掘りするものが多く確認できる。残存する深さは35~70cmであり、底面を標高値でみると各隅柱がその他の柱穴より20~40cm浅いことが確認できる。柱穴の埋土は黄褐色、褐灰色粘質土が主体であり、版築状に埋められているものが多い。このうち北側柱列東から1間目柱穴では、黄褐色土を主体とする粘質土が7層にわたってつき固められていた。柱痕跡は径15~25cmである。床束は側柱柱穴の柱痕跡と接して設けられている。こ



第8図 S B1437掘立柱建物柱穴断面図

のうち北側柱列東から1間目と西妻棟通りの床束では柱痕跡を確認している。掘方は一辺15~25cmの方形であり、埋土は側柱柱穴のものと類似している。柱痕跡は径約10cmである。

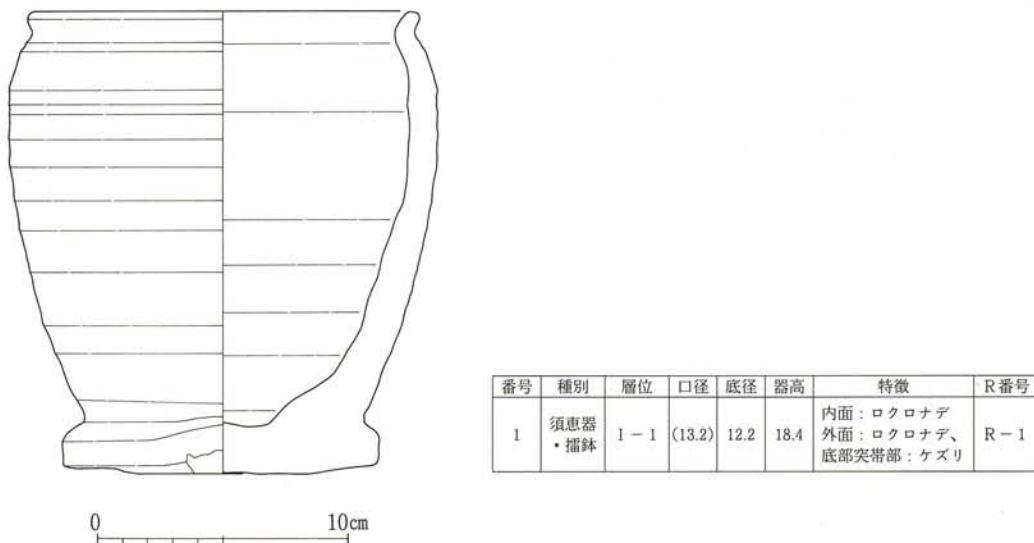
遺物は掘方埋土から須恵器杯・甕・瓶、土師器杯・甕が出土した。このうち土師器杯では、底部手持ちヘラケズリのものがある。

2) 壁穴住居跡

【S I 1438壁穴住居跡】(第4・5・9・10図)

東半部の地山上で発見した壁穴住居跡である。南半部が現代の搅乱によって破壊されており、北半部の周溝および床面が残存するのみである。S B1436・1437掘立柱建物跡、S I 1439壁穴住居跡、S D1441溝跡と重複し、S I 1439壁穴住居跡よりも新しく、その他のものよりも古い。規模は北辺が約2.3m、西辺が2.1m以上である。方向は北辺で計ると、発掘基準線に対して西で約11度北に偏している。床は岩盤上に自然堆積した黄褐色砂質土を床面としている。周溝は削平された南半部以外すべてで確認した。規模は上幅10~20cm、下幅5~12cmである。床面からの深さは4~10cmであり、北西から南東に向かって傾斜している。

遺物は、床面直上から須恵器杯・瓶・擂鉢、土師器杯・甕が出土した。

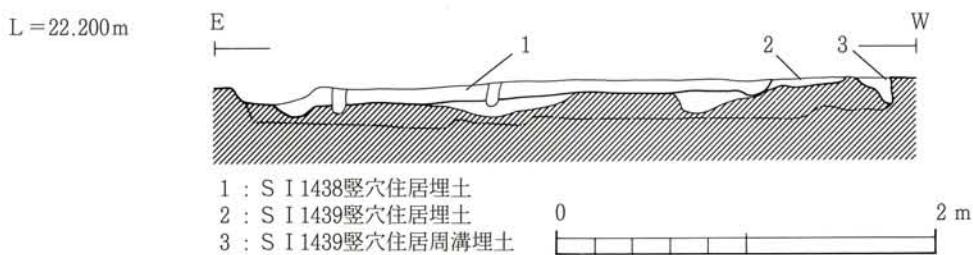


第9図 S I 1438壁穴住居 出土遺物

【S I 1439竪穴住居跡】（第4・5・10図）

東半部の地山およびS X1457整地層上面で発見した竪穴住居跡である。南半部が現代の搅乱によって破壊されており、北半部の周溝が残存するのみである。S B 1436・1437掘立柱建物跡、S I 1438竪穴住居跡、S D 1441溝跡と重複し、そのいずれよりも古い。規模は北辺が約3.2m、西辺が2m以上である。方向は北辺で計ると、発掘基準線に対して西で約2度北に偏している。堆積土は西端部で1層のみ確認できる。にぶい黄褐色粘質土であり、焼土粒、地山粒が多量に混入している。床は岩盤上に自然堆積した黄褐色砂質土を床面としている。周溝は削平された南半部以外すべてで確認した。規模は上幅10~15cm、下幅5~10cmである。床面からの深さは3~8cmであり、北西から南東に向かって傾斜している。

出土遺物はない。



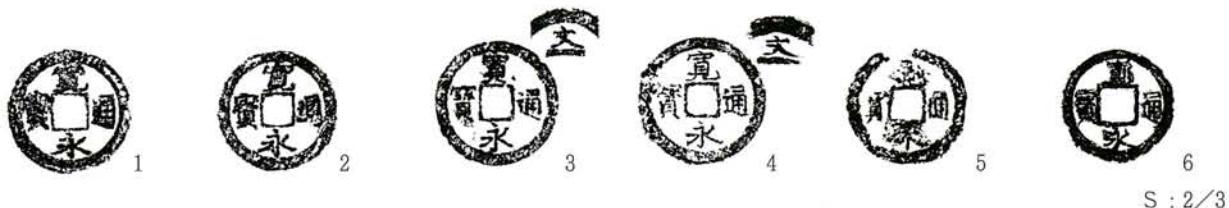
第10図 S I 1438・1439竪穴住居断面図

3) 近世墓

【S P 1444墓跡】（第11・13図）

西半部の地山上で発見した円形木棺を伴う墓跡である。掘方は円形であり、規模は径55cm、深さ42cmである。埋土は褐色土が主体であり、明黄褐色土や小礫が混入する。壁は垂直に立ちあがり、底面は南側に傾いている。木棺の規模は径45cmであり、底面付近に木質部が僅かに残存する。埋土は灰黄褐色土を主体とし、黒色粘質土が多く混入する。

遺物は棺内部より寛永通宝が6点出土した。すべて銅銭であり、内訳は古寛永銭2点、文銭2点、新寛永銭2点である。



番号	種別	層位	計測値	備考	R番号	番号	種別	層位	計測値	備考	R番号
1	寛永通宝・古寛永銭	棺内部	径 2.5		R-6	4	寛永通宝・文銭	棺内部	径 2.5		R-9
2	寛永通宝・古寛永銭	棺内部	径 2.4		R-7	5	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径 2.4		R-10
3	寛永通宝・文銭	棺内部	径 2.5		R-8	6	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径 2.3		R-11

第11図 S P 1444墓跡出土遺物

【S P 1445墓跡】（第12・13図）

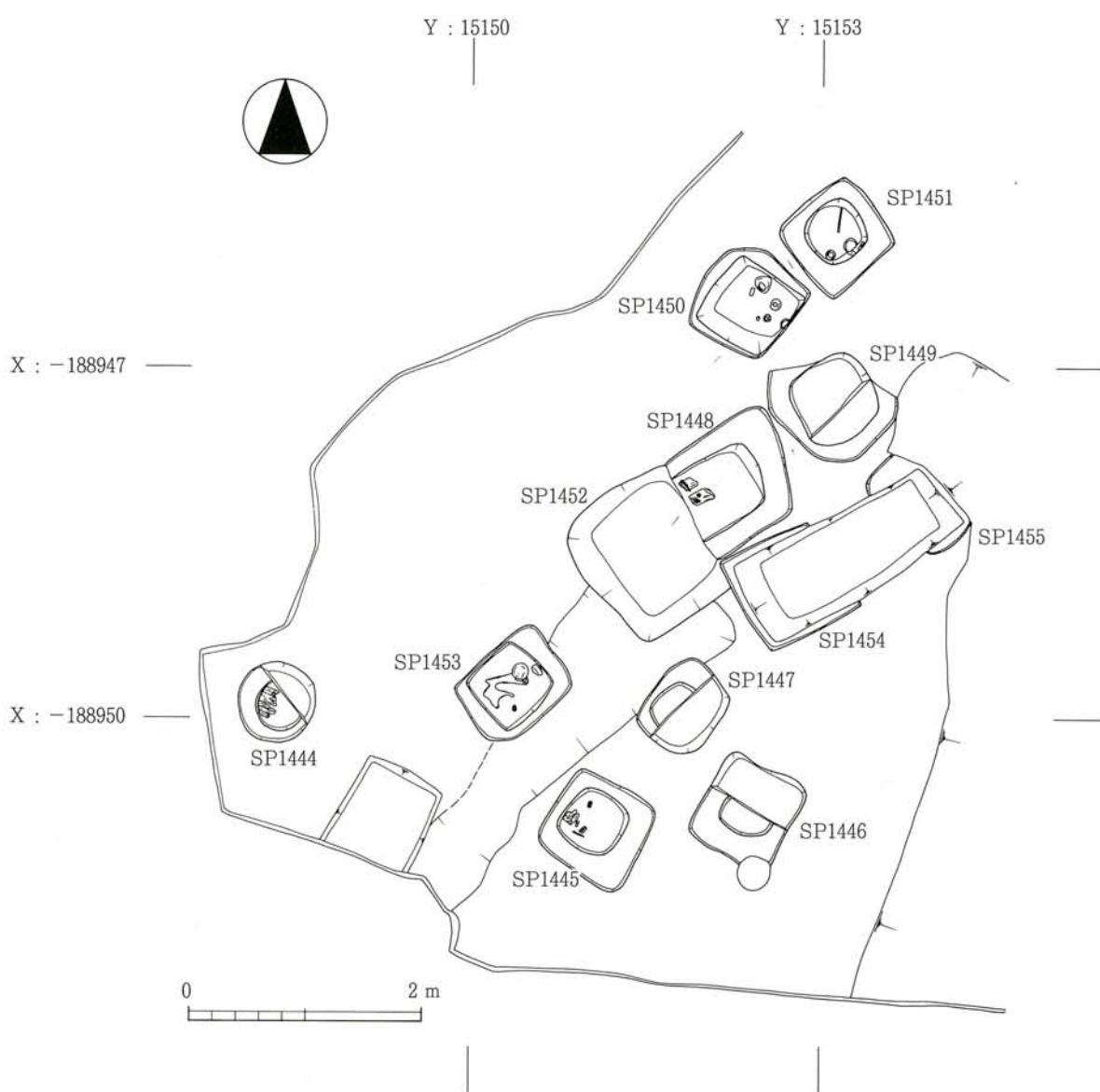
西半部の地山上で発見した方形木棺を伴う墓跡である。掘方は方形であり、規模は長辺85cm、短辺76cm、深さ40cmである。埋土は3層に区別することができる。1・3層がにぶい黄褐色土、2層が黒褐色土であり、2層には炭化物が層状に堆積している。壁は垂直に立ちあがり、底面は平坦である。木棺の規模は一

辺50cmであり、底面付近に木質部が僅かに残存する。埋土は褐色土が主体であり、地山粒が僅かに混入する。

遺物は棺内部より寛永通宝、煙管雁首が出土した。寛永通宝は鉄錢であるが、鋳で癒着しており点数は明らかでない。煙管雁首は主部に細かい線条が認められるものである。



第12図 SP 1445墓跡出土遺物

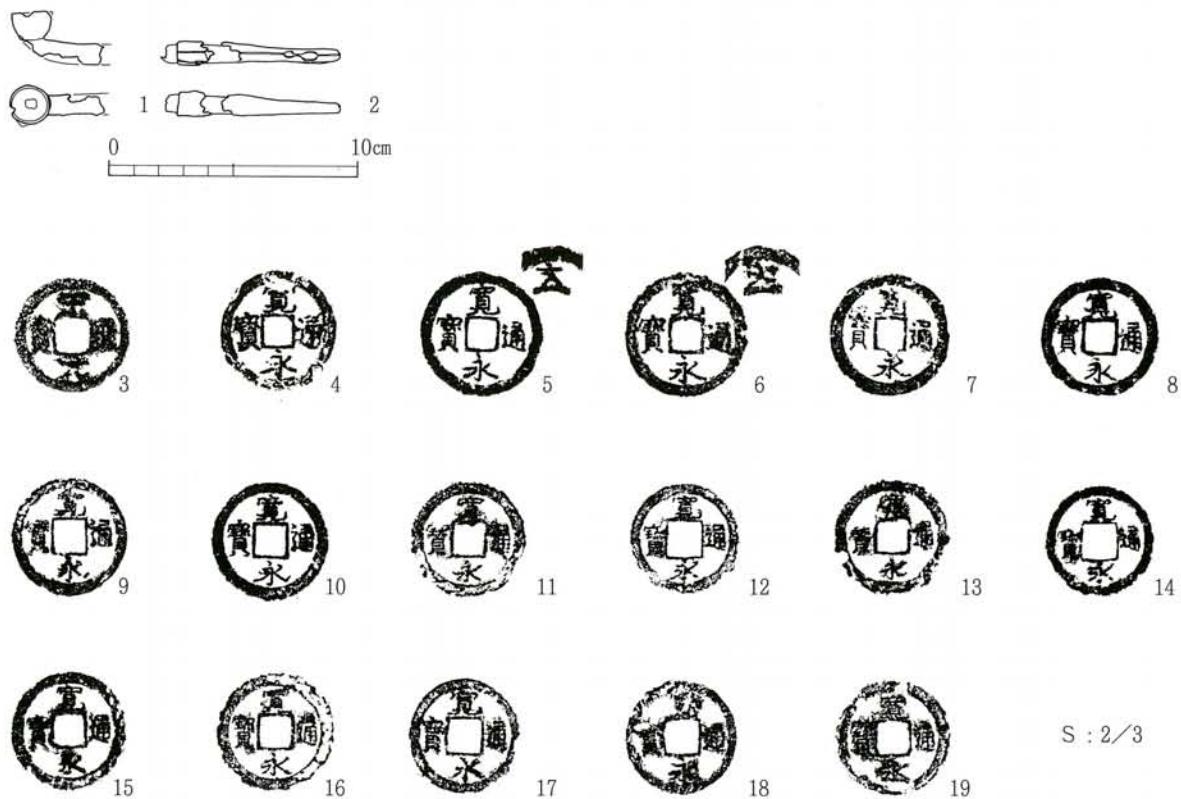


第13図 調査区西端部近世墓群

【S P1448墓跡】（第13・14図）

西半部の地山上で発見した方形木棺を伴う墓跡である。S P1452と重複し、それよりも古い。掘方は方形であり、規模は長辺95cm以上、短辺95cm、深さ60cmである。埋土は2層に区別することができる。上層が褐色粘質土、下層が褐灰色粘質土であり、いずれも地山ブロックが多量に混入する。壁は垂直に立ちあがり、底面は平坦である。木棺の規模は長辺60cm以上、短辺58cmであり、底面付近に木質部が僅かに残存する。埋土は暗灰黄色粘質土が主体であり、地山ブロック、礫が混入する。

遺物は棺内部より宗通元宝1点、寛永通宝16点、煙管1組が出た。寛永通宝はすべて銅銭であり、内訳は古寛永銭1点、文銭2点、新寛永銭13点である。煙管の雁首は脂返しの湾曲が小さく、火皿と主部の間に補強帯の巡らないものである。



S : 2/3

番号	種別	層位	計測値	備考	R番号	番号	種別	層位	計測値	備考	R番号
1	煙管・雁首	棺内部	火皿径: 1.6		R-2	10	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3		R-19
2	煙管・吸口	棺内部	羅字接合部径: 0.9 吸口径: 0.5	羅字残存	R-3	11	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3		R-20
3	北宋銭・宗通元寶	棺内部	径2.3	初鋤年代: 960年	R-12	12	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.2		R-21
4	寛永通宝・古寛永銭	棺内部	径2.4		R-13	13	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.2		R-22
5	寛永通宝・文銭	棺内部	径2.5		R-14	14	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.2		R-23
6	寛永通宝・文銭	棺内部	径2.5		R-15	15	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3		R-24
7	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.5		R-16	16	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.4		R-25
8	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.4		R-17	17	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3		R-26
9	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3		R-18	18	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3		R-27
						19	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3		R-28

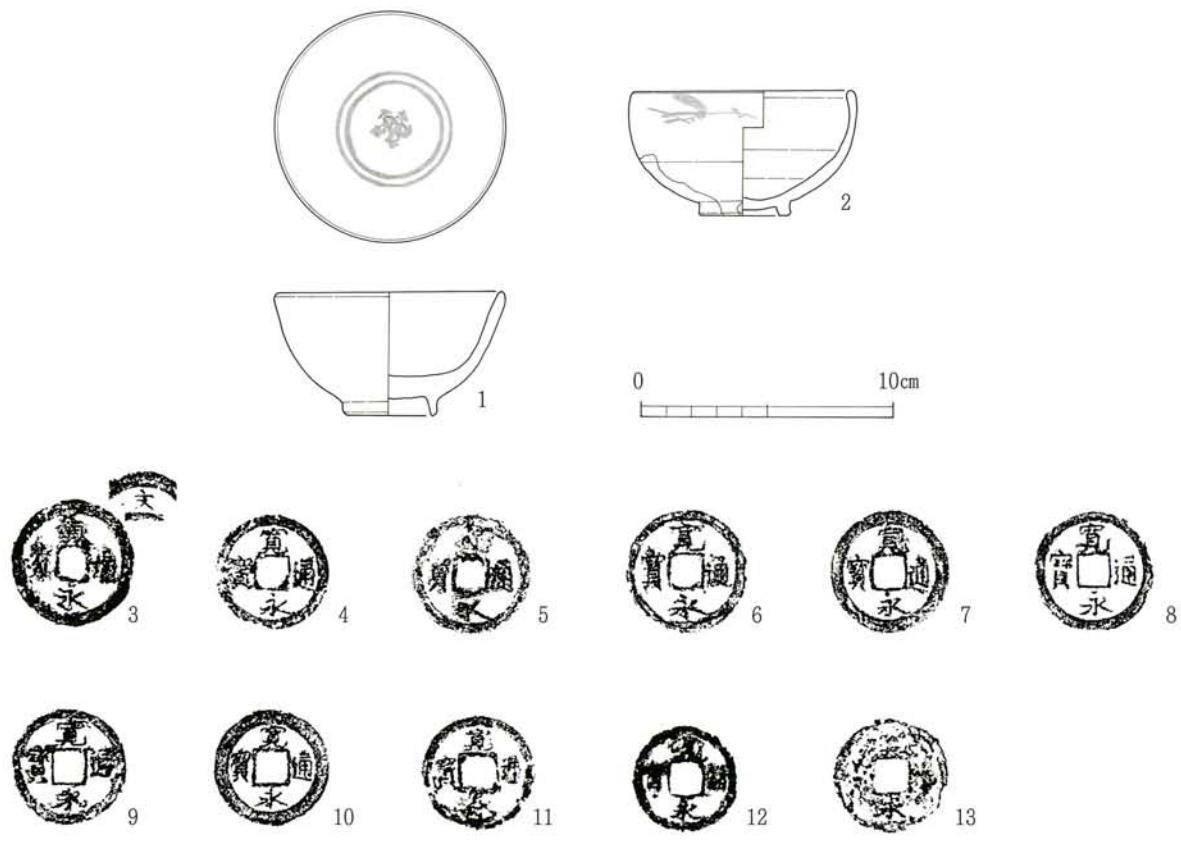
第14図 S P1448墓跡出土遺物

【S P1450墓跡】（第13・15図）

西半部の地山上で発見した方形木棺を伴う墓跡である。掘方は方形であり、規模は長辺90cm、短辺84cm、深さ82cmである。埋土は2層に区別することができる。共に黄褐色土が主体であり、地山ブロックが多量に混入する。壁は垂直に立ちあがり、底面は平坦である。木棺は痕跡のみが残存している。規模は一辺70

cmである。埋土は暗灰黄色粘質土が主体であり、地山ブロック、礫が混入する。

遺物は棺内部より寛永通宝、煙管雁首 1 点、陶器碗 2 点、漆器椀が出土した。寛永通宝には銅銭と鉄銭がある。銅銭は文銭 1 点、新寛永銭 10 点である。鉄銭については鋸による癒着が著しく点数は明らかでない。煙管雁首は火皿部の破片資料である。陶器碗には透明釉をハケ塗りしたもの（1）と、淡い緑色釉を浸け掛けしたもの（2）がある。漆器椀は漆膜が残存するのみである。



番号	種別	層位	口径	底径	器高	特徴	R番号	番号	種別	層位	計測値	備考
1	陶器・碗		8.8	3.4	4.8	内・外面：透明釉ハケ塗り	R-2	7	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.4	R-33
2	陶器・碗		8.6	3.5	4.9	内・外面：灰釉浸け掛け 高台部：回転ケズリ	R-3	8	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.4	R-34
3								9	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3	R-35
4								10	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3	R-36
5								11	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3	R-37
6								12	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.1	R-38
7								13	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3	R-39
番号	種別	層位	計測値			備考						
3	寛永通宝・文銭	棺内部	径2.5				R-29					
4	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.3				R-30					
5	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.4				R-31					
6	寛永通宝・新寛永銭	棺内部	径2.4				R-32					

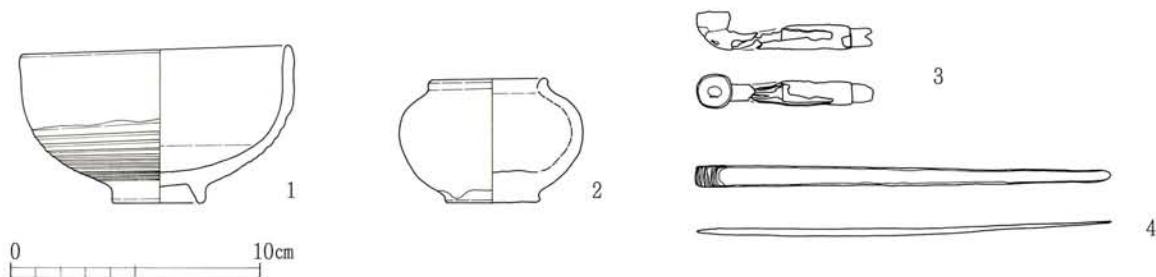
第15図 S P 1450墓跡出土遺物

【S P 1451墓跡】（第13・16図）

西半部の地山上で発見した円形木棺を伴う墓跡である。掘方は方形であり、規模は一辺 80cm である。埋土は 3 層に区別することができる。1 層がオリーブ褐色土、2・3 層が黄褐色土であり、地山ブロック、黒褐色土が混入する。壁は垂直に立ちあがり、底面は平坦である。木棺は痕跡のみが残存しており、規模は長径約 50cm である。埋土は 2 層に区別することができる。共に黄褐色土が主体であり、地山ブロックが混入する。

遺物は棺内部より寛永通宝、煙管雁首、陶器碗・壺、鼈甲製品（簪か？）、漆器椀が出土した。寛永通

宝は鉄銭であるが、鋸による発着が著しく点数は明らかでない。煙管の雁首は脂返しの湾曲が小さく、火皿と主部の間に補強帶の巡らないものである。陶器碗は口縁部から体部上半に灰釉、体部下半から底部に鉄釉をかけ分けたものである。陶器壺は内・外面に鉄釉が浸け掛けされている。漆器椀は漆膜が残存するのみである。



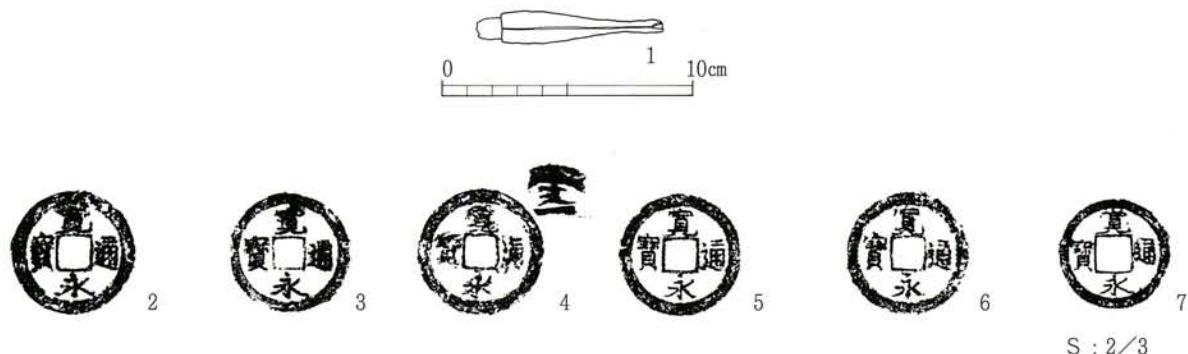
番号	種別	層位	口径	底径	器高	特徴	R番号	番号	種別	層位	計測値	備考	R番号
1	陶器・碗		11.4	3.7	6.1	灰釉・鉄釉の掛け分け 体部下半に細かい線刻あり	R-4	3	煙管・雁首	棺内部	火皿径: 1.3 羅宇接合部径: 0.9	羅宇残存	R-4
2	陶器・小型壺		4.5	3.6	4.9	内・外面鉄釉 底部: 回転糸切り	R-5	4	鼈甲・簪 (?)		長さ: 16.6		

第16図 S P 1451墓跡出土遺物

【S P 1453墓跡】（第13・17図）

西半部の地山上で発見した方形木棺を伴う墓跡である。掘方は方形であり、規模は長辺90cm、短辺70cm、残存する深さは10cmである。埋土はにぶい黄褐色土が主体であり、地山ブロックが多量に混入する。壁は垂直に立ちあがり、底面は平坦である。木棺は痕跡のみが残存しており、規模は一辺約60cmである。埋土は暗灰黄色粘質土が主体であり、地山ブロックが多く混入する。

遺物は棺内部より、寛永通宝6点、煙管吸口、漆器椀が出土した。寛永通宝はすべて銅銭であり、内訳は古寛永銭2点、文銭1点、新寛永銭3点である。漆器椀は漆膜が残存するのみである。



番号	種別	層位	計測値	備考	R番号	番号	種別	層位	計測値	備考	R番号
1	煙管・吸口	棺内部	羅宇接合部径: 1.1 吸口径: 0.5	羅宇残存	R-5	4	寛永通寶・文銭	棺内部	径2.5		R-42
2	寛永通寶・古寛永銭	棺内部	径2.5		R-40	5	寛永通寶・新寛永銭	棺内部	径2.5		R-43
3	寛永通寶・古寛永銭	棺内部	径2.4		R-41	6	寛永通寶・新寛永銭	棺内部	径2.5		R-44
						7	寛永通寶・新寛永銭	棺内部	径2.3		R-45

第17図 S P 1453墓跡出土遺物

4. 遺構の年代

掘立柱建物跡では、SB1435建物跡柱穴から回転糸切り後手持ちヘラケズリ調整された須恵器杯、SB1436・1437建物跡からは底部切り離し後手持ちヘラケズリ調整された土師器杯が出土している。10世紀前後に出現するとされている赤焼き土器が出土していないことから、建物跡の年代は概ね9世紀頃と推測される。

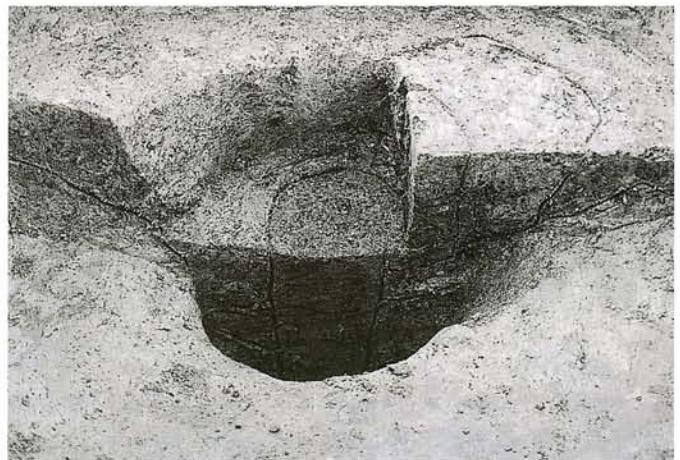
豎穴住居跡については重複関係で掘立柱建物跡よりも古いことが明らかである。しかし、出土した遺物は非常に少なく、年代が推定できる資料はSI1438住居跡床直上より出土した須恵器擂鉢があるのみである。県内における須恵器擂鉢の出土例をみると、多賀城跡大畠地区、古川市名生館官衙遺跡、仙台市大蓮寺窯跡、色麻町日の出山窯跡、利府町硯沢窯跡などに類例が認められ、①7世紀末～8世紀前半：名生館官衙遺跡SI1278床直上、大蓮寺5号窯跡燃焼部、硯沢B14窯跡出土のもの、②8世紀中頃：日の出山第4号窯跡出土のもの、③9世紀：多賀城跡SK1060土壤Ⅲ層、名生館官衙遺跡SD1416溝堆積土出土のものに分けられる。器形的な特徴については、①では体部が直線的に外傾するのに対して、②・③ではやや丸みを持ち内湾気味に立ちあがる傾向がうかがえる。底部はいずれも厚く、その周縁は体部下端から外側に突出している。突出した周縁上端部については、上方に立ち上がるものとそうでないものがあるが、年代的な変化は認められない。口縁部については①では大きく外反するものと直線的なもの、②では内湾するもの、③では緩やかに外反するものと直線的に立ち上がるものが確認できるが、いずれも年代的な変化を示すものとは言い難い。さて、本遺跡SI1438住居跡から出土した擂鉢をあらためてみると、年代的に変化する傾向が認められた体部の特徴については、内湾気味に立ち上がる点が指摘できる。これは、上述した②・③のものと類似することから、8世紀中頃以降である可能性が考えられる。また、掘立柱建物跡の年代が9世紀頃であることから、SI1438は8世紀中頃～9世紀頃のものであると推測できる。重複関係でSI1438よりも古いSI1439の年代については、出土遺物が無いため明らかでない。

西半部で検出した近世墓については、すべての墓跡から新寛永銭あるいは鉄銭が出土している。したがっていずれも1697（元禄10）年以降のものである。これらの墓跡は、a) 銅銭のみで構成されるもの（SP1444・1448・1453）と、b) 鉄銭を含むもの（SP1445・1450・1451）がある。a)は新寛永銭の鋳造年代より1697年～1781（天明1）年以降の年代が与えられる。b)は江戸で鉄銭が鋳造されはじめた1739（元文4）年以降のものである。なお、今回の調査では、表土除去の段階で多数の墓石が出土しており、いずれも享保年間以降のものであった。これらの墓石と検出した墓跡の位置関係について明らかにすることはできなかったが、概ね一致した年代であると考えられる。

5. まとめ

1. 今回の調査では古代の掘立柱建物跡5棟、豎穴住居跡2棟、近世の墓跡12基を発見した。
2. 古代の建物跡のうち、SB1437建物跡は床張りであった可能性が高い。

(註) SB1437遺物跡では、建物内部に床束を検出することはできなかった。しかし、側柱痕跡に接するこれらの柱穴は、側柱柱穴より新しく切取穴埋土除去後に検出していることや、側柱痕跡よりも内側にあり非常に浅いことなどから、従来床束とされているものと類似している。したがって、ここではこれらの柱穴を床束と判断した。

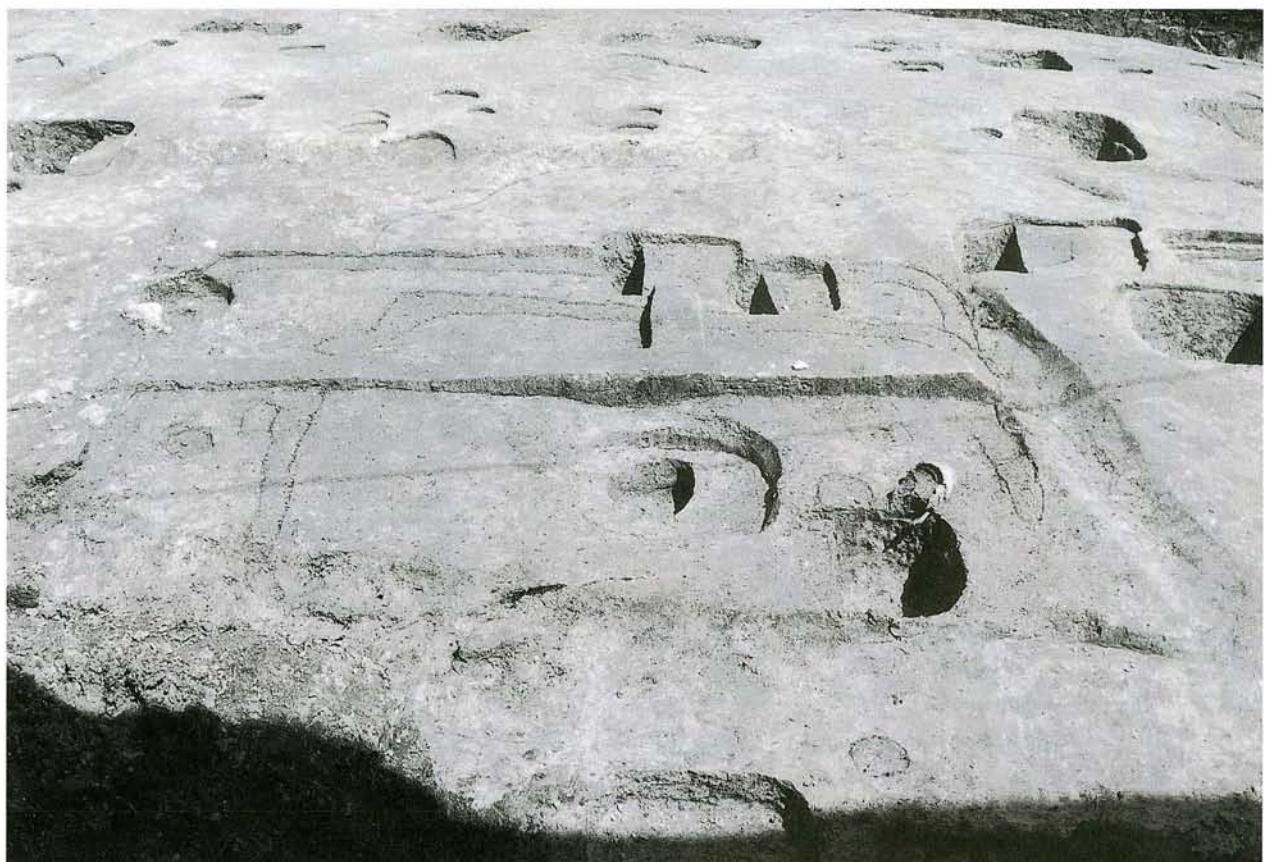


図版 1

上：調査区東半部全景（西より）

中：S B1437北側柱列
東より 2間目柱穴

下：S B1437西側柱列
北より 2間目柱穴



図版2

上：S I 1438・1439堅穴住居
(南より)

中：S I 1438堅穴住居
須恵器・擂鉢出土状況

下：同上



図版 3

上：西半部近世墓全景写真
(西より)

中：SP 1450遺物出土状況

下：SP 1451遺物出土状況

III. 西沢遺跡第7次調査

1. 遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡は、多賀城市市川・浮島の両地区に所在している。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって派生した低丘陵上の南西端部に位置し、東西450m、南北700mの範囲を占めている。標高は北側の丘陵尾根付近で約46m、南側の沖積地と接する付近で約4.5mであり、全体としては斜面の合間に大小の谷が入り込んだ景観を呈している。

今回の調査区は本遺跡の南端部にあたり、埋没谷から沖積地（低湿地）に移行する南向きの緩斜面に位置する。調査区の現況は畠であり、標高は最も高い北側で約6.4m、最も低い南側で約4.9mである。

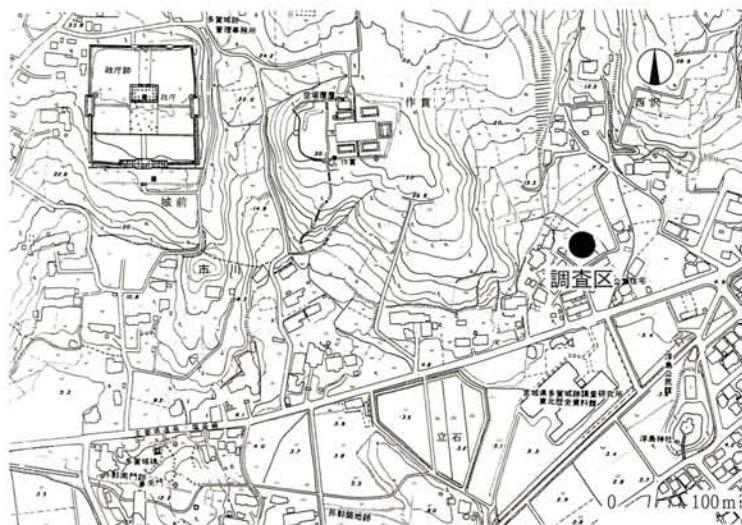
本遺跡の西側には、古代陸奥国府及び鎮守府が置かれた特別史跡多賀城跡が隣接している。今回の調査区から約40m西側には平安時代の外郭東辺築地があり、その内側には実務官衙域とされている大畠・作貫地区が位置している。一方、東側には奈良・平安時代を中心とする遺物散布地である法性院遺跡、高原遺跡が所在している。

本遺跡内では、これまで9度にわたる発掘調査を実施しており、古代から近世にかけての遺構・遺物を多数発見している。第3次調査では、平安時代の鍛冶工房跡を含む14棟の竪穴住居をはじめ、中世の建物・井戸・土壙・溝などを発見している。また、東側の沢を隔てた第2次調査区では、平安時代の掘立柱建物19棟、竪穴住居4棟のほか、計画的に配置された中世の掘立柱建物36棟などを発見した。出土した遺物には、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世の各時代のものがある。

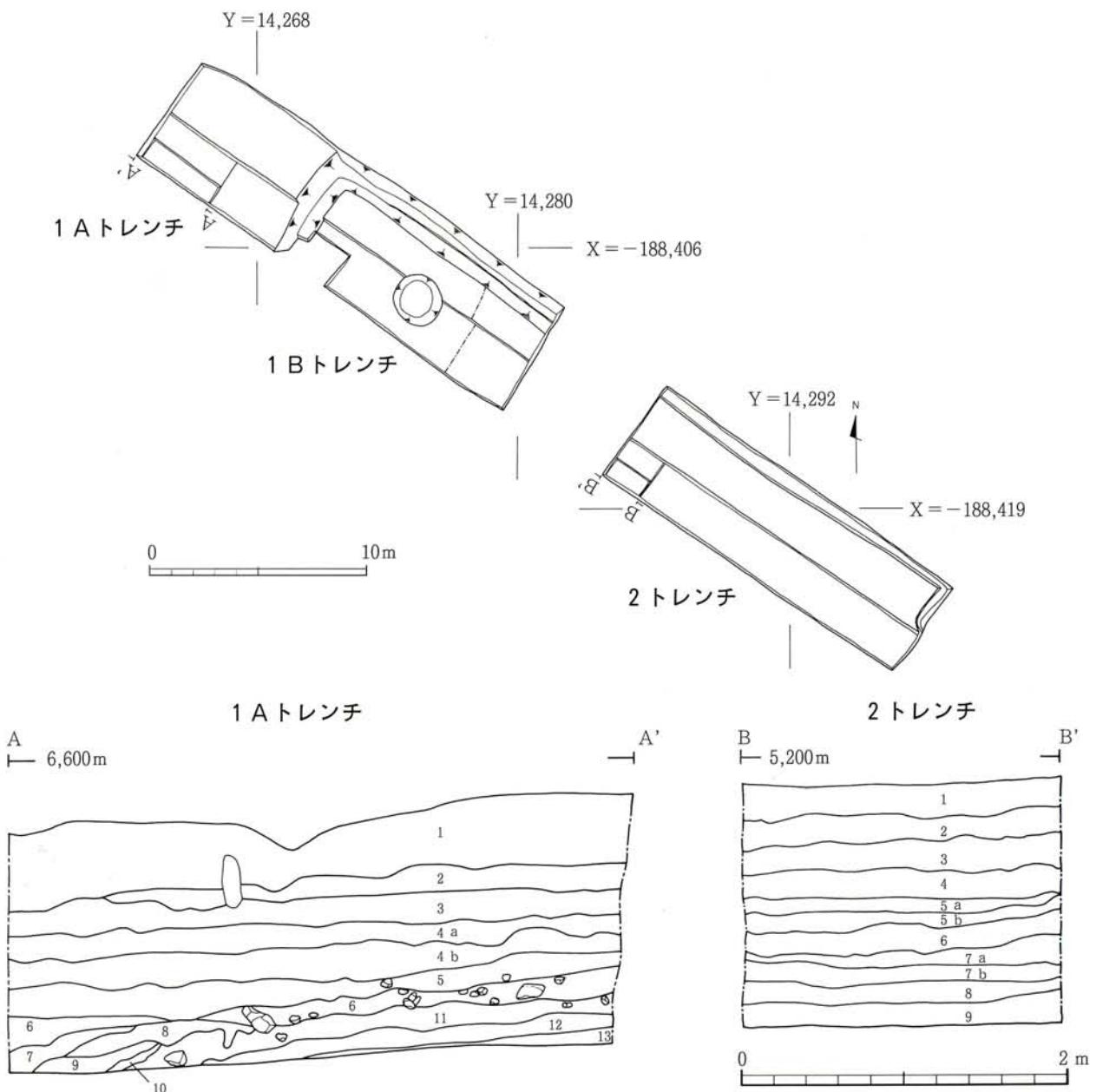
この遺跡の特徴は、大畠官衙域と同様に平安時代に入ると鍛冶工房群の設置をはじめとして遺構・遺物が格段に増加する傾向が認められる点にある。また、灰釉陶器、緑釉陶器、硯、石帯、馬具なども出土することから、一般の集落跡とは異なり古代陸奥国府多賀城の強い影響下にあったものと考えられる。

2. 調査に至る経緯と調査経過

本調査は、アパート建設工事に伴う遺構確認調査として実施した。この地域は多賀城跡の外郭東辺築地の東側に隣接しているが、以前の調査ではスクモ層が厚く堆積する湿地的状況を確認している。したがって、今回の調査でも同様な土壤環境が予想された。試掘坑は建設予定地内を北半と南半に2分割して設定し、北半をさらに1A・1Bトレンチ、南半を2トレンチとした。発掘調査は4月15日から開始し、まず重機を使用して表土剥離をおこなった。4月20日には作業員を動員して遺構検出作業にはいり、各層上面にて遺構の有無を確認しながら掘り下げを行う。4月23日からはこれらの作業と並行しながら平面・断面図の作成を行い、28日には全ての調査を完了した。



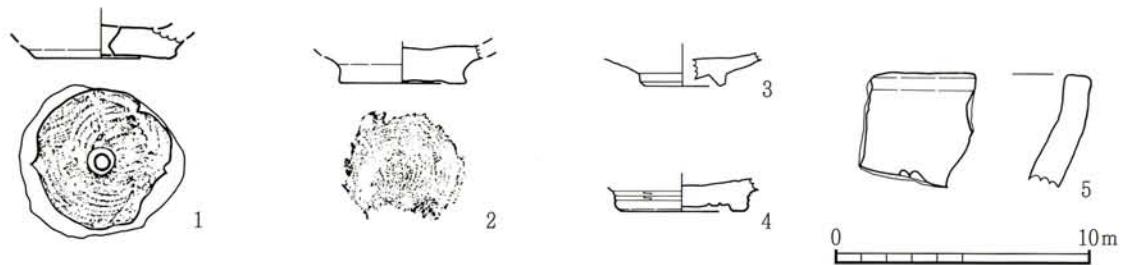
第1図 調査区位置図



1 A トレンチ		
1 層	10 YR 6/1	褐色 砂質シルト(盛土)
2 層	7.5 YR 5/2	灰褐色 砂質シルト 橙色粒含む
3 層	10 YR 4/1	褐色 砂質シルト 橙色粒、木炭粒含む やや粘性あり
4 a層	10 YR 5/1	褐色 粘土質シルト マンガン斑含む
4 b層	10 YR 6/1	褐色 粘土質シルト マンガン斑、橙色粒含む
5 層	N 6/	灰色 シルト質粘土 繖若干含む
6 層	7.5 YR 6/4	にぶい橙色 シルト質粘土 繖多量に含む 酸化が著しく堅い
7 層	N 5/	灰色 シルト質粘土 均質
8 層	5 GY 5/1	オリーブ灰色 粘土質シルト 均質 ややしまりなし
9 層	7.5 Y 5/1	灰色 粘土質シルト 灰黒色の粘土ブロック含む
10 層	N 8/	灰白色 灰白色火山灰層
11 層	N 6/	灰色 砂質シルト 灰黒色粘土ブロック 繖含む
12 層	N 4/	灰色 砂質シルト 砂粒(大)含む
13 層	N 4/	灰色 粘土

2 トレンチ		
1 層	10 YR 6/1	褐色 砂質シルト
2 層	10 YR 6/3	にぶい黄褐色 砂質シルト やや粗くボサボサしている
3 層	10 YR 5/1	褐色 粘土質シルト やや粘性強く、粒子も細かい
4 層	10 YR 7/1	灰白色 砂質シルト 粗砂多く含む しまりなし
5 a層	2.5 Y 7/1	灰白色 粘土質シルト 粘性強くマンガン斑、管状酸化鉄斑紋あり
5 b層	2.5 Y 6/1	黄褐色 粘土質シルト 上層より粘性強い マンガン斑あり 檻粒含む
6 層	10 Y 6/1	灰色 粘土 均質 黒灰色帯が2~3条入る 管状酸化鉄斑紋あり
7 a層	7.5 YR 6/4	にぶい橙色 砂質シルト 均質 酸化しており堅い
7 b層	2.5 GY 4/1	暗オリーブ灰色 砂質シルト 7a層より酸化していない
8 層	10 GY 3/1	暗緑灰色 シルト質粘土 砂質粒均質に含む
9 層	10 BG 5/1	青灰色 シルト質粘土 上層より粘性強く砂粒も小さい

第2図 トレンチ配置図と土層断面図



番号	種別	器種	トレンチ・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	かわらけ		1 B 4層	ロクロナデ 底部回転糸切り 内外面より穿孔有り	ロクロナデ	底部	5.5		5-1	4	
2	かわらけ		1 A 5層	ロクロナデ 底部回転糸切り	ロクロナデ	底部	5.1		5-2	5	
3	白磁	皿	1 A -				(3.4)			1	
4	天目茶碗	碗	1 A -	回転ケズリ		高台部	(5.0)		5-3	2	
5	中世陶器	擂鉢	1 A 4層	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ	口縁部			5-4	3	

第3図 基本層出土遺物

3. 調査成果

1) 1 A トレンチ

深掘り区内では、現表土より約1.5mまで掘り下げて層序の確認を行なった。その結果、13枚の土層の違いが認定された。1～2層は表土層あるいはごく最近の畑の耕作土である。4a～5層は土相が類似し、堆積状況も南にゆるやかに傾斜する共通性がある。出土遺物には中世に属するものがあり、堆積年代も概ねこの頃とみられる。6層以下の層は、その上層に比べ堆積角度がやや急になる。このうち10層は、灰白色火山灰の1次堆積層で厚さ5cmを計る。トレンチ内では平面的に確認することができた。6層以下の年代は、出土した土師器・須恵器・瓦片の特徴及び灰白色火山灰との関係から平安時代頃に比定できる。

2) 1 B トレンチ

現表土より約0.7mまで掘り下げ、5枚の層序を確認した。このうち3層は土相の類似性から1 A トレンチの4 b層に対応するものと考えられた。

3) 2 トレンチ

深掘り区内では現表土より約1.5mまで掘り下げて層序の確認を行なった。認定した層序は9枚である。このうち6層は、1 A トレンチ検出の5層に対応するものと考えられる。このトレンチでは、各層とも南方へゆるやかな傾斜をもって堆積している。

4. まとめ

- (1) いずれのトレンチ内でも地層の変化は漸移的で、各層の上面において遺構は検出されなかった。
- (2) 遺物は若干出土しているが、古代のものについてはいずれも細片化していること、磨滅しているものが多いこと、まとまりを持った出土状況を示していないことから上方からの流れ込みと考えられる。
- (3) 2 トレンチ内の土壤について、5a・6・8・9層を対象にプラントオパール分析を行なった(註)。いずれの層からもプラントオパールが3,000個以上検出され、特に5a・6層では10,000個近い量で、同層での稲作は確実と報告されている。6層は1 A トレンチの5層に対応することから、中世に位置付けられる。このことから畦畔等の遺構は発見できなかったが、この周辺の谷地形部分においては、中世に谷水田が営まれていたことが判明した。
- (4) 平成元年に行った南側に隣接する市営住宅建設関連の調査では、灰白色火山灰層下にスクモ層が堆積

しており、湿地的様相が強い場所であったことが確認されている。今回の調査区では下層にいくほど粘性の強い土になる傾向はみられたが、スクモ層は検出されなかった。

(註) 株式会社 古環境研究所に依頼した。



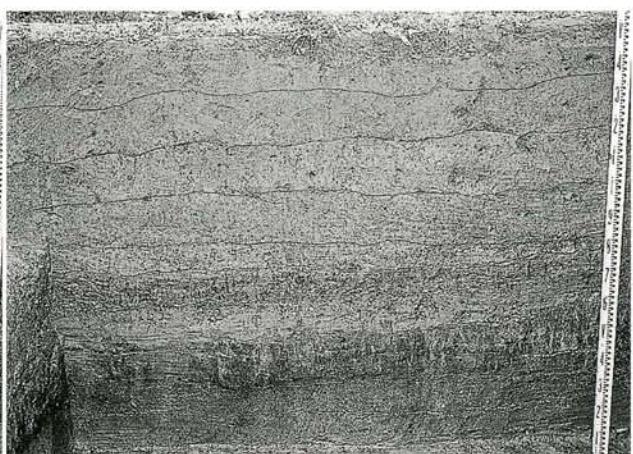
図版1 調査区全景(南より)



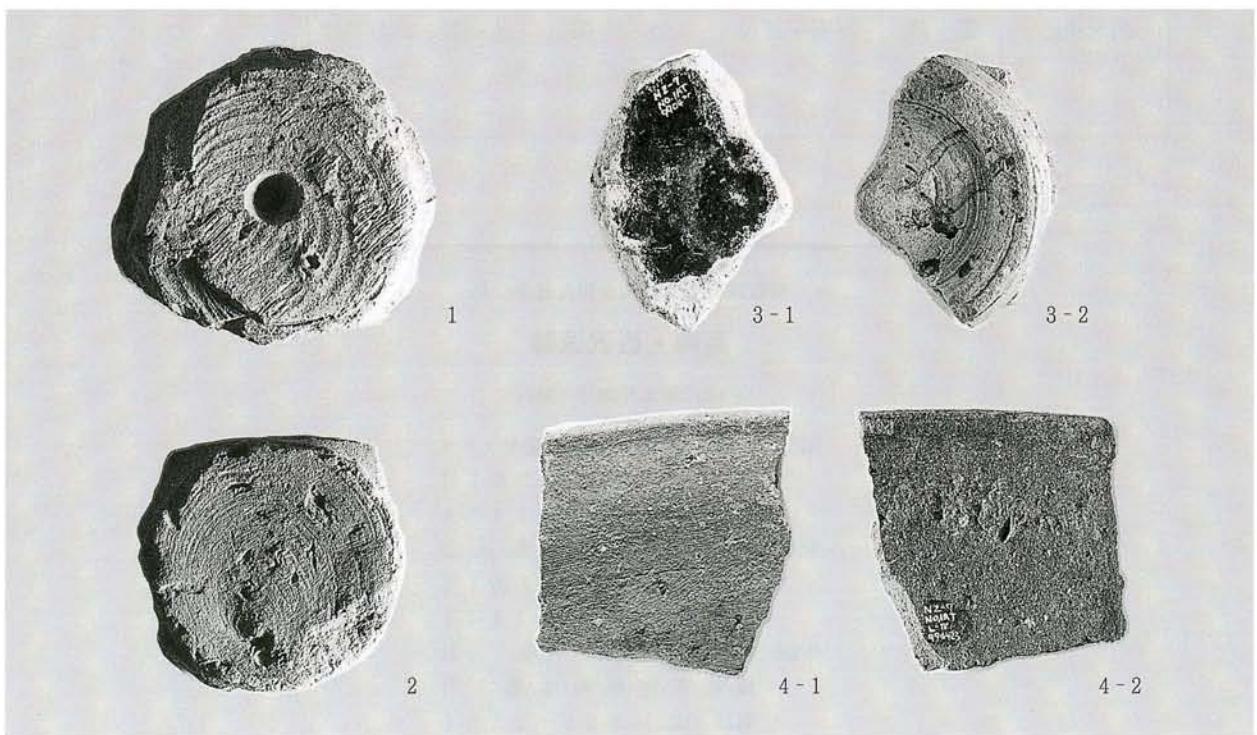
図版2 1 A トレンチ10層上面灰白色火山灰の状況



図版3 1 A トレンチ土層断面



図版4 2 トレンチ土層断面



図版5 出土遺物 1. かわらけ 2. かわらけ 3. 天目茶碗 4. 中世陶器

報告書抄録

ふりがな	たかさき・にしざわいせき							
書名	高崎・西沢遺跡							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第63集							
編著者名	石川俊英・相澤清利・武田健市・菊池豊							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 Tel022-368-0134							
発行年月日	西暦2001年3月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高崎遺跡	多賀城市 留ヶ谷	市町村	遺跡番号	38度 17分 9秒	141度 0分 22秒	19980402 ~ 19980423	720m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高崎遺跡	集落	奈良・平安 近世	掘立柱建物 竪穴住居 近世墓	須恵器・擂鉢、 陶器、古錢、煙管	床張りの掘立柱建 物跡を発見。			
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西沢遺跡	多賀城市 浮島	市町村	遺跡番号	38度 17分 44秒	140度 59分 48秒	19990415 ~ 19990428	180m ²	個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西沢遺跡	集落	平安～近世	水田	土師器、かわらけ				

多賀城市文化財調査報告書第63集

高崎・西沢遺跡

平成13年3月26日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
 多賀城市中央二丁目27番1号
 電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会
 多賀城市中央二丁目1番1号
 電話 (022) 368-1141

印刷 有限会社 工陽社
 塩釜市尾島町8番7号
 電話 (022) 365-1151